

10月になった途端、朝が寒いくらい冷え込むようになりましたね。台風一過、空は青く、風が素肌に心地よい…。街角にはコスモスも揺れています。本を一冊、ポケットにしのばせて、ちょっとその辺りを歩きましょうか。

ひとり林に……

立原道造

だれも 見ていないのに
咲いている 花と花
だれも きいていないのに
啼ないている 鳥と鳥

通りおくれた雲が 梢の
空たかく ながされて行く
青い青いあそこには 風が
さやさや すぎるのだらう

草の葉には 草の葉のかげ
うごかないその ふかみには
てんとうむしが ねむっている

うたうような沈黙しじまに ひとり
私の胸は 溢れる泉！ かく
脈打つひびきが時を すずめる

（詩集『立原道造全集第1巻』

・山本書店・1941年刊）

『故事成句でたどる楽しい中国史』（井波律子著・岩波ジュニア新書・2004年刊）

中国四千年の歴史の中に生起する数々の名場面。そこには名君、暴君、英雄、詩人、はたまた美女たちが入り乱れ、多くの含蓄ある言葉が生まれました。覆水盆に返らず、背水の陣、井の中の蛙、登龍門……。それら珠玉の言葉は古びることなく、今も私たちの生活の中に息づいています。故事成句をキーワードにたどる、ものがたり中国史。

＜第一章 「覆水盆に返らず」一名君と暴君の時代―＞より「1 五帝時代」

黄帝、獐猛な反逆者を討つ

前漢の司馬遷しはせんが著した『史記』は、太古の神話・伝説の時代から前漢までの歴史を記した通史です。この『史記』の冒頭に置かれた『五帝本紀』には、太古の五人の伝説的な聖天子、すなわち黄帝・顓頊・帝嚳・堯・舜の伝記が収められています。

五帝の筆頭にみえる黄帝はすぐれた軍事能力の持ち主でした。そのころ天下を治めていたのは神農氏ですが、その勢力が下り坂にさしかかったため、諸侯があい争い、社会不安が激化しました。黄帝は神農氏にそむいた諸侯を次々に討伐し、ついに最後に残った二人の手ごわい反逆者、炎帝を「阪泉の戦い」で、蚩尤を「涿鹿の戦い」で滅ぼし、乱世をおさめました。

この二人の獐猛な反逆者との戦いは激烈をきわめ、とりわけ魔術を駆使する怪物、蚩尤との戦いは困難の連続でした。たとえば、涿鹿の野における決戦のさい、蚩尤が魔術をつかって濃霧を発生させたのに対し、黄帝は指南車をつくって自軍を導き、ついに蚩尤を追いつめて生け捕りにしたと

されます。指南車とはつねに南の方角を指し示す仕掛けを備えた車です。後世、人を指導することを指南といい、その役割をになう人物を指南番とか指南役と称するのは、この故事をもとにしています。

こうして混乱状況をおさめた黄帝は、諸侯に推され神農氏にかわって天子の座につきました。天子となった黄帝は暦をつくり農業を盛んにするなどして、天下を安定させました。この黄帝を皮切りに、太古の理想社会、五帝時代の幕が開きます。

理想の君主、堯舜

黄帝の後を継いだ孫の顓頊、顓頊の後を継いだ帝嚳（黄帝の曾孫。顓頊の叔父の孫。）の二代をへて、天子となった堯（帝嚳の子）はとびきりの名君でした。彼は天子の位にあること五十年、豊かな社会を築きあげることに成功します。しかし、堯は人々がほんとうに充実した幸福な生活を送っているかどうか、確信が持てませんでした。そこで、あるとき、お忍びで町に出掛けたところ、一人の老人が食べ物を口に含み、鼓腹撃壤（腹 鼓をうち、土をたたくこと）しながら、こんな歌をうたっていました。

日出而作	日出でて作し
日入而息	日入りて息う
鑿井而飲	井を鑿 うが ちて飲み
畊田而食	田を畊 たが して食らう
帝力何有於我哉	帝力 何ぞ我れに有らんや

「日が出ると働き、日が沈むと休息する。井戸を掘って水を飲み、田を耕して食べる。天子の力なぞわれわれには何の関係もない」

この歌は、人々が天子の支配力を意識しないほど、社会が穏やかに安定していることを示しています。この故事をもとにして、太平の世を喜ぶことを「鼓腹撃壤」と称するようになりました。この堯のように強い支配力をむき出しにしない天子像、支配者像こそ、その後長らく中国の理想的君主のイメージとなります。

堯は高齢になると、不肖の息子丹朱をしりぞけ、民間から舜しゆんを抜擢して、自分の二人の娘と結婚させ、天子の職務を代行させました。舜は顓頊の六世の孫で、はるかに黄帝の血筋をひくとされます。また、舜は親孝行で有名な人物であり、目の不自由な父の瞽叟が、後妻のいいなりになって、彼に辛くあたったにもかかわらず、誠実に仕え続けました。これによって名声が上がり、堯の摂政として推薦されたのです。舜は中国東部や南部を巡察して北の文明を伝え、天下を十二州に分けて統治し、反逆者を放逐するなど、堯の摂政として大いに腕をふるいました。堯の死後、舜はいったん堯の子の丹朱に帝位を譲りますが、人々の心が彼に帰したため、丹朱にかわって即位するに至ります。

五帝の最後、舜に至るまで、誰もが黄帝の血をひくとはいえ、聡明な者、有能な者が天子に選ばれるという原則にかわりはありません。このように、最もすぐれた者が天下を統治し、太平の世を招来したとされる太古の理想社会は、堯・舜の時代にクライマックスに達しました。後世、こうした堯・舜の世は人々の憧憬の対象となりつづけます。

…しかし、禹は夏王朝の始祖となり、以後、天子の位は世襲されることになります。かくして、伝説の聖天子時代は終わるのです。

五帝および禹の聖天子伝説は、おそらく太古の時代、めまぐるしく行われた力づくの政権交代を美化し理想化したものなのでしょう。しかし、神話や伝説は人々の願望を織り込みながら形づくられてゆくものであり、その意味で聖天子伝説は、中国における太古の夢の結晶だといえます。（pp.2-7）

